
わたしはもうゲストじゃない。

同志社香里中学校3年 大村 奈緒子

目が覚める。右をむくと、すでに短針が七の半分を過ぎていた。急いでベッドからの飛び降り、着替えてリビングへと向かう。留学二日目の朝である。

「そうだ、今はホームステイ中なんだ。」

中学三年生になる手前、私はアメリカサンフランシスコへの交換留学プログラムに参加した。現地の中学校の人とバディになって、その生徒の家族と約八日間を過ごす。

さて、家を出る時間が迫っている——余裕はない。食卓に整然と並べられた朝ごはんを急いで食べ、リュックを背負い、車に乗り込む。初めて見る景色、広い道。遠くには恐竜の形をした遊具が凜と立っていた。心地の良い朝である。

学校に着くと、バディと共に食堂へ向かった。今日は初登校日だから、自己紹介と三分程度のプレゼンをしなくてはならない。どんな人がいるのだろうか。ワクワクする。扉を開けるともうすでに自己紹介が始まっていたが、なんとか間に合い無事プレゼンも終えられた。

その後はバディと分かれて日本語のクラスに参加したり、科学の実験に参加したり、ちょっとした体験でも気分が高まった。他の学校から来た日本人の留学生とも出会い、英語縛りでの会話をもしてみた。

そんなこんながあつて放課後、バディとホストマザーと共に、人生初の海外での買い物をした。車のトランクにリュックを置いて、スマホ片手に商店街へ。まずはタピオカショップに向かった。日本の二、三倍ほども高さのあるタピオカティーはとても甘く私の気分と最高にマッチしている。しかしその時、私はあることに気づいた。財布を忘れてしまったのだ。カードも。スマホ以外全て、あのトランクに置き去りにしてしまった。せっかく商店街に来たのに、これじゃ台無しっ……、そんな表情を察したのだろうか。ホストマザーが

「どうかしたの？」

と尋ねてきた。もちろん隠すわけにはいかないから、私は正直に

「実は、車に財布もカードも置いてきてしまった。」

そう答えると、彼女は笑って答えた。

「心配しないで。今日は全部私が払うわ。だってあなたは私たちのゲストなんだから。」

「ゲスト」私は心の中で繰り返した。彼女の声は優しかった。彼女は、親切にそう言ってくれたに違いない。しかし私にはそれは違ってきこえたのだ。「ゲスト」たった三文字でこんなにもモヤモヤするなんて。

家に帰ると、自分の部屋に戻って今日の出来事を日記に書き記す。たくさんの美味しいご飯、お菓子、おしゃれなお店。でもあの三文字が、ずっと頭にこびりついて離れなかつた。アメリカへ渡る前、

「あなたたちは、バディの家族の一員として迎えられます。だから、失礼なことや自己中心的なことはしないように。」

そう説明会でも言われたし、飛行機の中で読んだ本にもそう書かれていた。だからこそ、自分が家族と

して認められていないように感じた。面と向かって「ゲスト」と呼ばれるることは、たとえ優しさであろうとも悔しかったのだ。最後にその三文字を書き足して、素早く日記を閉じた。

目が覚める。またもや短針が八に傾きはじめていた。急いでベッドからの飛び降り、着替えてリビングへと向かう。留学三日目の朝である。食卓横の大きな窓からまばゆいほどの光が差し込み、ホストファミリーと私の四人全員が揃って席に着く。昨日のことは忘れよう。私はそう思いながら、クラッカーを口に近づけた。リュックを背負い、車に乗り込み、学校へ向かう。今日はどんなことを教えてもらうのだろう……、私は期待に胸を膨らませた。

九時半。私たちが受けたのは想像していた「授業」ではなかった。景色や植物など、五感を使って詩をつくったり、カードゲームで規則性を見出したり。業、つまり先生から仕事や学問を教えられるのではなく、「自分でコンテンツを生み出して新しい思考を模索する」という内容だったのだ。詩はアイデアが浮かばなくて苦戦したし、カードゲームでは友達に何度も負けて悔しかった。でもだからこそ、自分の試行錯誤した過程が形となって現れた瞬間の達成感は普段より何倍にも膨れ上がるのだ。

そうして三日目、四日目を過ごしていくうちに、あの三文字の記憶は新たな思い出によってだんだんと薄められていった。

四日目の夕方。留学ももう半分が過ぎた。私と友達、そしてそのバディたち八人は海に向かった。車を降りると森があって、その先に海岸がある。小道を進み、横になっている大木も乗り越えて、清涼な風が吹く崖の下へ。久しぶりにサラ砂に触れた。日が傾くまで、友達とはしゃぎながら貝殻をさがしたり、岩に登ったり……、「ばしゃん！」靴に塩水が染み込んだ。つめたい。急いで靴をぬいで、砂浜に戻る。軽く足を洗って、私は小さな岩に砂のついた白い靴を立て掛けた。その後黒い靴が追加され、数個の貝殻をゲットして、ようやく私たちは海沿いのレストランに入った。レストランの窓からは沈みかけの太陽がこちらを向いていて、ここだけ時間が半分の速さで流れているようだ。オレンジ色の光。ゆつたりとした雰囲気に英語と日本語が九対一の割合で行き交っていた。

夜遅くなつて、家に着く。街灯が暗闇の中で輝いている。玄関を抜けてすぐにシャワーを浴び、家族に夕日の写真を送つてそのまま深い眠りについた。

目が覚める。まだ短針が六に達していない。留学五日目の朝である。今日は祝日らしく、金・土・日と三日連続でホストファミリーと共に過ごす。朝食だくさんのベーグルを食べ、博物館へ行き、そのままドライブして巨大な橋にも行く予定らしい。今日からは特別急ぐ必要もなく、ゆつたりと用意して玄関の扉を開けた—その時だった。ホストマザーが私の手のひらに、冷たい銀色の棒を置いた。

「えっ？」

訳も分からず戸惑っている私に、彼女はこう言った。

「これはあなたのものよ」

いつも通りの、自身のある堂々とした声。その時、三日前の記憶が蘇った。私はもう、ゲストではないのだ。

これまでずっと、日本にいた。別段それが悪いとは思わなかつたし、外国へ行きなさいと言われたこともなかつた。でもプログラムの募集のプリントを見た時、「やってみたい」と好奇心が湧いたのだ。応募後の選考試験や留学準備は忙しく、ホームステイにも不安は尽きなかつたが、今振り返ると人生で最も成長した八日間だと確信を持って言える。帰る場所も一つ増えた。

これから幾度となく春は巡り、数えきれない程の人々と出会うだろう。当たり前に、大人になる。3年後の今日、私はどこにいるだろうか。またどこかで寝坊をしているのだろうか。もっともっと遠いところで。でも、この八日間を忘れるることはできない。引き出しの中にある一本の鍵が、その記憶を蘇らせるのだ。